

前漢書平話前集・後集の復元

Reconstruction of *Qian-Han Shu Pinghua Qianji* and *Houji*

プロジェクト代表者：大塚秀高（教養学部・教授）
Hidetaka Otsuka (Faculty of Liberal Arts・Professor)

1 研究の経過

まず、前年度に私費で中国のOCRソフト業者に依頼し作成済の、元代に出版された『前漢書続集』と、その250年後に増刪されて成立したと推定される『全漢志伝』ならびに『両漢開国中興伝誌』の本文データを加工し、比較対照できるよう、同一頁のなかに表の形で並べた。

次に、OCRで読み込んだデータが原資料を忠実に反映しているか否かの確認をした。この段階で中国のOCR技術の水準の高さに驚かされた。繁体字・俗字・異体字などが見事に再現されていたからである。しかし、よくみると、その技術をもってしても再現できない文字もかなりあったし、想定外のミスもあって、全体として翻字の精度は95%程度と判明した。加えて、原資料の不備に伴う問題が存在していることもわかった。

原資料は、いずれも天下の孤本である。内閣文庫所蔵の『前漢書続集』については系統の異なる影印本が複数あり、原本の閲覧も可能だったが、蓬左文庫所蔵の『全漢志伝』ならびに『両漢開国中興伝誌』の影印本は同一系統のものであり、撮影の関係で「のど」の部分が判読しがたいという欠点があった。それゆえ、手元の紙焼き資料及び影印本などによってこの両者のOCRデータに可能な限り修正したのち、名古屋の蓬左文庫にでむき、原本によって直接確認することにした。

次に同一頁に貼り付けた生データに、句読点などの標点を施した。その際、すでに複数の標点本が出版されている『前漢書続集』、近年標点本がでた『両漢開国中興伝誌』についてはこれらを参照したが、『全漢志伝』はそうしたものがなく、独自に標点を施さざるをえなかった。その際、こうした標点本の句読点にもかなり誤りがあることがわかった。

そもそも俗文学文献は、本来の正しい文字を刻さず（或いは記さず）、俗字・異体字、甚だしきは意味のまったく異なる同音で筆画の少ない文字を代用することが少なくなかった。字形の近似による誤刻（或いは誤写）が頻出するのも常であった。今回のプロジェクト研究で対象とした三文献もその例に漏れない。だが、上記の標点本は、そうした面での校正が不十分であった。脱字・衍字の指摘もなされていない場合もあった。そこで、第三段階として、そうした文字の校正をおこなった。

最後に、上記三種の資料のそれぞれを、ストーリーの展開にしたがって段落分けし、それらを相互に対応させ、三者の発展関係が明瞭になるようにした。

2 研究の成果

かくて、『前漢書平話続集』と、これに対応する『全漢志伝』ならびに『両漢開国中興伝誌』の輯校本（初稿）ができあがったのであるが、この輯校本にはまだ校正漏れが存在する可能性が高かった。そこで、上記の作業と並行し、東京大学大学院人文科学研究科中国語中国文学科の授業でこの初稿を用いた演習をおこない、博士課程ならびに修士課程の院生の協力を得て、その精

度を上げることとした。

以上の成果は、授業で取り上げた『前漢書平話続集』巻上に対応する部分だけであるが、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第4号（2007.3）に、大塚秀高「前漢書平話続集・全漢志伝・両漢開國中興伝誌輯校本（試行本）並びに研究」として、すでに公開している。東京大学大学院での授業は今年も継続しており、中巻・下巻部分についても、順次『日本アジア研究』誌上で公表してゆく予定である。なお、ゆくゆくは『前漢書平話続集』に対応部分全体を冊子として公開することになっている。

3 今後の研究計画

幸いなことに、このプロジェクト研究を発展させた研究が、平成19・20年度の科学研究費補助金の基盤研究（C）に「前漢書平話前集・後集の復元を通して見た全相平話」として採用されることになった。平成18年度のプロジェクト研究では、中国の業者へOCRデータ作成を依頼したことにもなう支払い作業の遅延で、データの入手が遅れ、着手するにいたらなかった『全漢志伝』と『両漢開國中興伝誌』の、『前漢書平話続集』対応以前の部文、すなわち筆者のいうところの『前漢書平話』前集・後集部分の輯校本の作成を可及的速やかに進め、それをもとに『前漢書平話』前集・後集の復元するという、本来の目的に近づく作業に邁進したいと考えている。